

日本災害看護学会 先遣隊活動報告

4月24日（日）の活動

活動者：渡邊智恵、寺田英子

当日の状況（2016年4月24日）

地震発生から2回目の週末を迎えた。仮設住宅建設予定という新聞記事が一部（西原村で50戸）で出て、指定の避難場所以外の避難所を徐々に閉所していくということで、生活再建に向けた歩みが少しずつ進んでいる状況である。

1. 行程ならびに訪問先

- 8:00 ホテルを出発
- 9:40～10:20 益城町内避難所③訪問
- 10:30～12:00 益城町内の避難所④訪問
- 15:20 レンタカーを博多駅に返却

2. 活動内容

最終日となるこの日は、甚大な被害を出した地域の一つである益城町で、未だ医療チームが入っていない2か所の避難所を回ることにした。

1) 益城町内の避難所③

一昨日に訪問をした避難所を再訪問して、経過をうかがった。出産まじかの妊婦さんは23日に陣痛が始まり、自家用車で医療機関に行き、無事出産をされていた。病院ではミルクやおむつがないため、持参をするようにということで避難所から必要な物を運ぶ必要があったという。避難所では、入院している母親に代わって、長女（13歳）が6人の弟妹の面倒をみていた。一昨日見た時よりも表情が硬く、目が充血しているように見えた。睡眠について尋ねると、長女は下の兄弟に夜中に起こされるとポツンと言葉が少なく、疲労の色は隠せなかった。頑張っていることを認め、一人で頑張らずに大人の助けを借りてもよいことを伝えた。

股関節痛のあった女兒は昨日医療機関を受診し検査等を受け、その後痛みが取れ、今日は動き回っており不在であった。

生後2カ月の乳児を抱えた母親は、赤ちゃんが2,400グラムとやや小さめに生まれたため体重の増加を気にしていた。しかし保健師の訪問も地震のために途絶え、予防接種のことなども相談することもできないと語られた。授乳の状況や赤ちゃんの機嫌などに問題はないように感じたが、母親は、避難後に赤ちゃんが夜中によく起きるようになったと変化を敏感に感じ取っていた。母親は、地震の後そういった心配や不安を誰にも相談できずにいたのか、私たちにずっと話し続けた。ホルモンの影響など体調が安

定しない時期であり、心身のケアが必要であり、できる範囲で傾聴をしていった。

2度目の訪問で、避難所で頑張っておられたお世話役の三人が、笑顔で私たちを迎えてくださった。その中の一人は、普段の血圧は低めであったが、血圧測定をすると普段より 20mmHg ほど高かった。他の二人も普段よりやや高めを示したが、大きな身体症状は認められなかった。一人は自宅が倒壊して他の避難所から、この避難所の世話をしていた。もう一人は、小さな子供がいるのにこの避難所の世話をしていた。それぞれ被災されながらも、避難所のマネジメントを継続されていた。お互いに家庭の事情や被害状況を理解しているため、立場や心身の状態を気遣い、なんとか頑張っておられた。緊張をとる方法等について説明を行い、一緒に深呼吸等を行った。また、異常を感じたら少しでも心身を休むように、さらに悪化する場合には受診をするように勧めた。

物資については、必要な物が運ばれてくるようになっており、野菜等が箱一杯に並べられていた。お米を炊いて、サランラップに茶碗一杯くらいのコメを包み、保温をされていた。被災者の方々がほしい時にいつでもとることができ、温かい米を提供できるよう工夫されていた。水が使えるようになっているが、非常に貴重なので、災害時には無洗米が良いということ語られた。

この避難所は連休明けには閉所する予定である。それまでは自助と共助でやっていくということであった。

2) 益城町内の避難所④

上記の避難所から車で 5 分くらい走ったところに、この避難所がある。約 30 人が避難されており、この近くに住んでいる高齢の方や子どものいる家族が入居していた（遠くの避難所は自宅の状況が分からなくなるため、やはり近くが良いという）。医療チームが入っていないということで、私達が伺うと、気になる 4 人のところに行って状態をみてほしいということをお世話役の人がすぐに言われた。ここでも、状況をよく理解している人たちが寄り添いあって避難所生活を送っておられた。この避難所は、あと 3 日で閉所になるという。

気になると言われた方は 4 人とも高齢の方であった。この中の一人は左半身麻痺のある男性で、日常生活援助が必要であり、特にトイレはこの避難所内ではできず、自宅に戻っているという。介護者の疲労が重なり、ご苦労されている話を傾聴した。その他には、杖や車いす等を使っている方々であり、福祉避難所の情報を確認する必要がある。

3. 課題

医療ケアの介入が殆んどない避難所に、妊産褥婦や乳児、歩行が困難な

高齢の方など特別の支援が必要な方が暮らしている。震災前から福祉避難所として指定していた施設も、一般の方々が多数避難して来られたため、その機能を失っている状況である。また住民自治会等のお世話役の人や施設管理者の努力や避難者の方々が協力しあうことで、なんとか避難所が運営されている現状である。

避難所のマネジメントに関わっている方々はいずれも体調を崩しかけており、血圧も平常時より高めになっていた。かなり疲労蓄積があるように見受けられる。

生活再建に向けた活動において、個人の格差が広がっている時期であり、個々の被災者へのきめ細やかなケアが必要となる（避難所を転々とするようになる人もいる）。

4. おわりに

被災地の方々は、生活再建に向けて懸命な努力をされている。その歩みを進めていくためのサポートや見守りが継続して必要である。2回目の訪問をした際に、私達を迎えていただいた笑顔は忘れることができない。

16日から始まった先遣隊活動も24日で終わります。復旧・復興に多忙を極めている中、貴重なお話を伺わせていただいた皆様に、こころより感謝をいたします。